（発行）東京都リハビリテーション病院医療福祉連携室
〒131-0034　墨田区堤通２－14－1
TEL：03-3616-8600　　FAX：03-3616-8699
http://www.tokyo-reha.jp/

東京都リハビリテーション病院
医療福祉連携室

ほっトリハフォーラム

第４号
H17年11月14日

「秋日　浅草寺菊花展」　*Photographer Hiroyuki Hattori*

多彩なボランティア　ありがとう！

当院ではボランティア活動の受入れを進め、内容の充実を図るため、ボランティア委員会を設置しています。委員は診療部、看護科、リハビリテーション部、医療連携室の代表で構成されています。では、ボランティア活動の具体例を紹介しましょう。まずは、年間を通じて行われるボランティア活動です。何といっても、入院患者さんの要望が最も高いのが理容師による月１回の理髪サービスです。障害が重く、なかなか理髪店までいけない人にも、短時間で手際良く整髪してくれる待ちに待ったサービスです。さっぱりしてもらうと心も気持ちいいものですね。また、作業療法室では、裁縫、陶芸、手芸、木工などの指導や補助をして下さっています。もう、キャリアも長いベテランぞろいの先生方です。その他、院内の廊下やロビーでは、季節感あふれる写真の展示も行われています。次に紹介するのは季節限定のボランティア活動です。夏季には、玄関ロビーにてピアノ演奏、コーラス、祭囃子、バイオリン演奏などを行っています。この時ばかりは患者さんもご家族もみな玄関ロビーに集まり、手拍子をとったり、歌を歌ったりと演奏者と一体になり参加します。夏や秋には、朝顔や菊の鉢が届きます。冬季には、病棟をサンタクロースがまわり、聖歌隊のキャンドルサービスがあります。年に１回の、とてもおごそかな夜です。

以上のようにみなさん、ご自身の技能を活かし、多くの人を心和ませてくれています。ボランティアに参加ご希望の方は、まずボランティア委員会に御連絡下さい。申込み手続きのご案内を致します。みなさんのご活躍をお待ちしております。

東京都リハビリテーション病院運営理念

身体に障害を持たれた方が生きる喜びと希望を抱き、充実した人生をおくられるよう、医の原点に立った心温まる医療の推進をはかる。

開発途上国からの研修生を受入れて

看護科長　鈴木　順子

８月３１日、国際看護交流協会の依頼を受け開発途上国の看護指導者研修を実施しました。研修生はバングラデイッシュ、エジプト、エリトリア、ホンジュラス、ラオス、モーリタニア、スリランカ、タンザニア、トリニダット・トバゴ、ウルグアイの各国からの 11 名。当日は病院紹介については教育委員会が中心になり、一部、英語版のスライドを披露しました。通訳は事務次長が流暢な英語で協力。施設案内は、病棟の他に理学療法室、作業療法室、言語療法室、心理療法室、医療福祉連携室でそれぞれの担当者から、わかりやすく説明をしました。病院を挙げての歓迎姿勢が、研修生皆さんの心に響いて、後日、国際看護交流協会から、研修生が高い評価をしていたと感謝の言葉を頂戴しました。それと同時に、開発途上国からの研修生を受入れて、次のような感想を話され、胸がつまる思いでした。

・自国は内戦が続いているので戦争による障害者が多い。
・余りにも豊富に補助具が揃っていて驚いた。プラスチックの義足は自国で作る技術がない上、車椅子一台を揃えるにも大変な状況下にある。
・リハビリテーションを始めるまでの水準には至っていないので、自国に帰ったら一歩からのスタートであり、学んだことを活かしていきたい。
・感染防止に徹底して取り組んでいるが、まず、自国は井戸を掘るところからのスタートである。

理学療法室で、吉村科長の説明に耳を傾ける研修生

短い時間でしたが、同じ看護を志している世界の仲間と交流が図れたことに、私達自身が学ぶことの多い一日でもありました。

食堂にて患者さんのデイリープログラムの説明中

作業療法室の力作に魅入っています♪

エントランスで別れを惜しんでの記念撮影

災害に備えて

地域との連携で訓練

今年度も１０月３０日（日）に災害時医療救護訓練が行なわれました。隣接する都営住宅からの負傷者救護受入れ訓練では、怪我や、ショックによる発症を想定してトリアージや、救急処置を行ないました。

自治会救護所から、模擬患者さんが車イスや担架で次々運ばれ、重傷のメーキャップをした病院職員と合わせ 20 人が応急手当てを受けました。

本番さながらに「胸部打撲！ドレナージ急いで！手術のできる病院に搬送」など大声の指示が飛交いジェラルミンケースの救急セットが配置され、１階ホールは緊迫した雰囲気に包まれました。病棟への患者搬送、シューター設置訓練なども合わせ行なわれ、向島消防署、墨田区防災課の指導、講評をいただきました。こうした訓練は毎年行なわれています。

オランダからのお客様

１１月６日に東京都医師会の主催する都民公開講座・専門家フォーラムの前日、オランダからの参加シンポジスト、アムステルダム自由大学クニプスヒア教授、ヤコベイン・グセクロー医師、スザン・セイモンスマさんらが当院を訪れ、訓練室や病室を見学されました。

翌日の専門家フォーラム『オランダから学ぶ高齢社会とケア』についての講演とパネルディスカッションには、当院看護科、医療福祉連携室からも参加し、来年から予定されている新しい保険システムや地域におけるサービスの質や医師との連携について学ぶ有意義な機会となりました。

雨のち晴れ …ある復活ものがたり

山田福寿（フクジュ）さん。

江戸川区平井在住。52 才の時に「脊髄硬膜外血腫」で緊急手術し下半身麻痺となる（車いすの生活）。その日から、復活の人生が始まる。長年の伴侶とは「離婚」という奥深い選択をする。都リハでは5ヶ月に及ぶリハ入院。再度転院。発病1年3ヶ月後に在宅生活が再開。
―あれから5年。この間、床ずれと骨折の治療のための「名誉入院」が2回。それでもたゆまず、夢ではなく、小さな目標・大きな目標に向かっての人生を歩む。

＜改めまして、略歴＞

中央区生まれ。サラリーマンを経て独立。海外商品の営業代行といった仕事を展開。これに伴い、（社）日米協会の教育交流委員会メンバー。アメリカ大使館が主催する会合に参加。発病後は車いすで若い女性をエスコートし、より存在感を強めて出席継続。

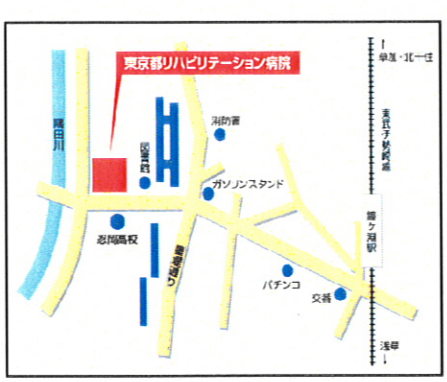
江戸川区内小学校にて、子どもたちに囲まれて

＜そして、今＞

江戸川区の住民となりボランティア登録（福祉ボランティア団体協議会会員）。自分の経験が役に立てばと、小中学校の福祉体験学習に講師として出向き、車いす体験を語る。この9月には7回もの講演をこなす。子どもたちからはきわめてストレートな質問がぶつけられる。「同情されて生きることをどう思うか？」 ―「同情されるより理解されたい」と応答。一番多い質問は日常的なことで、たとえば、「上のものをとったりするにはどうするか？」には、「ヘルパーさんがいない時にはあきらめる」と。子どもたちの最終的な反応としては、「・・・私だったら閉じこもる」。
そこで考えたのが、自分の経験を文字と絵にして伝えて行くこと。家にひきこもらないでほしい、との思いを込め、タイトルは、「でておいで」。

＜大きな目標＞

それは都リハのリハビリ室を切り取ったような障害者の通えるスポーツジムを作ること。
そしてその周囲に車いすで利用しやすい歯医者さんや眼科などを配置すること。
既に企画書に着手。
「いろんな人の援助を受けて今の生活がある。その中で自分にできることをやって行く」というのが基本的なスタンス。不自由は不幸ではないとも。不自由な体になっても豊かな心に、そして自分の体はこれからも宝物だということを忘れないでと語り続ける。



交通案内
（電車）浅草から東武伊勢崎線鐘ヶ淵下車徒歩7分
　　北千住から東武伊勢崎線鐘ヶ淵下車徒歩7分
（バス）両国から都営バス「病院前」下車（約30分）
（お車）首都高速六号線堤通ランプ下

＜編集後記＞

今回のテーマは「ふれあい」。菊花展には小学校からの出品もあり、秋の陽に咲き誇る菊の一鉢毎に、丹精こめた育て手の思いが伝わります。まっすぐ伸びた茎と、凛と咲く清楚な姿に励まされます。（T）